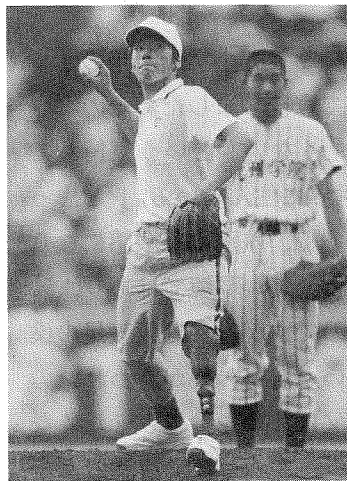


第1章 自分探しの旅

— 「高校生」として生きる —



平成11年8月7日 信濃毎日新聞夕刊掲載

第1節 さわやかな甲子園始球式 「ハンデイが私を大人にしてくれた」

平成11年8月7日の甲子園球場。第81回全国高校野球選手権大会開会式当日。開会式に続いて行われた始球式に登場したのは、白馬高校2年生の丸山直也君。17歳。彼は、左足の義足が見える半ズボン姿で阪神甲子園球場のダイヤモンドに姿を現したのです。一礼したあと、ひと呼吸してから投じた白球は、外角に大きく外れ。ちょっと苦笑いした直也君は、再び帽子を取って一礼し、笑顔でマウンドを降りました。そのさわやかな笑顔に、スタンドからは大きな拍手が沸き、なかなか鳴りやみませんでした。

丸山直也君は、1982年（昭和57年）6月8日、長野県北安曇郡白馬村で生まれました。2歳からスキーを始め、小学校3年生の時からジャンプ競技を始めました。ところが、小学校4年生の夏に交通事故にあい、左足の膝から下を失ってしまいました。でも、スキーをあきらめることはしませんでした。父の励ましもあり、白馬中学校ではアルペン部に入り、地元の白馬高校に進みました。

ところで、1998年（平成10年）の「長野冬季オリンピック・パラリンピック」は、世界中の人々に大きな感動と興奮を与えました。そして、「共に生きる」連帯のすばらしさを体験することができました。この、長野冬季パラリンピックに、日本人最年少選手として参加し、スキー回転の片下肢障害クラスで、みごと5位入賞を果たしたのが、丸山直也君でした。彼は、このパラリンピック開会式では、聖火の点火役も務め、精一杯青春を謳歌する日本の若者を、世界にアピールしました。

さて、この日、半ズボンでマウンドに立った直也君。「なぜ、半ズボンで？」との問いかけに「自分が始球式をするなら、義足で出なきゃいけない。それが半ば義務だと考えました。恥ずかしいという気持ちもありましたが、半ズボンと義足を見て何かを感じてもらうことの方が意味があると思いました。」と答えています。その直也君の生き方に学びながら、自分らしい生き方を求めて、仲間と一緒に「自分探しの旅」に出しましょう。

「ハンディが私を大人にしてくれた」(教材1-1)

長野県白馬高等学校 丸山直也

僕は小学校3年の時からスキーのジャンプ競技を始めました。そして小学校4年のとき、交通事故にあいました。6月14日に事故にあい、10月から義足で登校しました。そのときの僕は、「外に出たくない」「足を出したくない」「学校に行きたくない」という気持ちで一杯でした。障害を持ってからは、「自分はみんなと全く違う世界に住んでいる。」と思ったり、周囲からはじかれるような気持ちになったりすることが多く、差別にも敏感になりました。また、まわりの人たちに悪気がなくても、僕にとっては楽しい環境ではありませんでした。僕は当時、ジャンプ競技以外はやる気がしなかったのですが、父は仮義足の僕をスキー場に連れて行きました。僕はジャンプの選手になるという自分の夢が奪われたので、とてもスキーをやる気にはなれませんでした。でも、僕の父は「夢を捨てさせたくない。」と思ったのでしょうか。僕は、何度かスキー場に連れて行かれるうちに、滑れるようになりました。そして、スキーをすることが苦にならなくなりました。父は、「お前と同じ障害者もスキーをしている」ということを知らせたかったと思います。最初はジャンプ以外への種目変更に気が進まなかった僕でしたが、中学1年の時から競技としてやるようになりました。そして、種目は違っても、同じスキーに巡り会えて良かったと思えるようになりました。

僕が中学校に入学したら、中学校の先生は義足を気遣ってくれました。みんなと一緒に着替えられるか心配してくれたり、いろんな面で「無理しなくていい。」と気をくばってくれました。でもそれは、自分にとっては不快でした。障害者として特別視されているようだったからです。「大丈夫？」と聞くくらいはいいですが、かばい過ぎるのが嫌でした。僕は、このころから、どういう生活をしていったら両親の気持ちが軽くなるか考えるようになりました。そして、自分がずるずると障害を引きずらずに目標に向かって走っていけば、両親の気持ちもいくらか軽くなるのではないかと考えるようになりました。また、僕の考えが変わったのは、「自分が障害者だから…」という意識・マイナス思考では、かえって冷たく見られることが分かったからでもあります。「今の自分にとって一番恥ずかしいことは、障害を隠すことだ」と思うようになってきました。「自分の足は何で無いんだろう」という考えから、「自分の足は無いけれど、みんなとは違う足(義足)がある」というプラス思考が変わったのです。そして、アルペンスキーの選手になるという大きな夢を持つようになりました。僕は、「夢や目標をもつ障害者は、障害者であっても『障害者』ではない」と思います。

皆さんが障害をもったらどうしますか。障害…それは人間にとってはマイナスです。しかし、僕はプラスに考えています。僕も何年前前はマイナスに考えていました。障害をもってプラスになったことは「見えなかった世界が見えたり」「会えなかった人に会えたり」「できなかったことができたり」「ふだん感じられなかったことが感じられたり」といろいろあります。ですから、僕は今、皆さんの前に障害をもった自分をさらけだせる自分を「成長したなあ」と思っています。そして、「障害をもったことはマイナスだったけど、よい経験もたくさんできたなあ」とも思うようになりました。自分に障害がなければ、僕の生活はきっと平凡なものだったと思います。それでもなお、今日の講演のように、義足を外して話をするにはけっして恥ずかしくないということではありません。しかし、義足を外して皆さんの前に立つことで、皆さんのプラスになればいいと思っています。

僕は、皆さんも自分に対して積極的になれるといいと思います。そして、いつでも夢を持って生きてもらいたいと思います。もし、自分の夢を諦めることがあるとしたら、それは新しい夢ができた時だけにしてもらいたいと思います。

僕は、2年前のパラリンピックに参加して、「自分の障害ってなんて小さいんだろう」と実感しました。そして、足がないから障害者だと考えていた自分が恥ずかしくなりました。「自分は左足が無いけれど、義足をつければ普通の人と同じように生活できるんだ。それに、自分より障害の重い人が自分より頑張っている」と思うようになりました。そして、「長ズボンをどうはけば障害を見せなくてすむか」という考えから、「義足と分かる義足でいいじゃないか」と考えられるようになりました。そして、「自己を障害者と認める」ことができるようになりました。皆さんから見た僕は、『左足の無いかわいそうな人』かも知れません。自分も自分がかawaiiそうだと思っていました。しかし、自分の夢を追うことにより、障害を克服し、充実した毎日を送ることができるようになりました。そして障害をもってよかったと考えられるようになりました。「今の自分は幸せかもしれない。」…2年前のパラリンピックの時からそう感じるようになりました。僕はこれからも自分の夢に向かって精一杯頑張ろうと思っています。

(この文章は、丸山直也君が、平成11年にある学校で講演した内容から作成したものです。)

発展 乙武洋匡「五体不満足」(平成10年 講談社)も合わせて読み、各学級や授業などで、話し合いを深めよう。